

崇 武 館  
館長 飛鳥宗一郎  
（宗雄）

## 先人の言葉から学ぶ（9）

### なせばなる 出典・・・上杉鷹山（その1）

#### まえがき

- (1) 私は、山形県最上郡最上町に生まれた。最上郡内を最上川が貫流しているが生地の最上町は支流の小国川が流れているだけ、戦国時代から続く山形城11代藩主・最上義光(1540～1614年)との関りなら、小国日向守という武将の支城があつたに過ぎない。藩政時代は新庄戸沢藩の領地で小国郷と呼ばれ、明治時代以降は東・西を冠した二つの小国村に分割された。昭和29年(1954年)の町村合併で東西が一つになり、町民から公募して命名されたのが最上町という町名の由来である。

地理的には、熊本県の「阿蘇カルデラ」に次ぐ大規模のカルデラ盆地で、小国盆地と呼ばれており、形成されたのは約200万年前だという。周囲を1000mを超す山山が囲み、気候が寒冷のため作物の育ちや実りが悪く、名だた貧乏村であった。



小国盆地の冬景色（最上町）

せめてもの事として挙げるなら、文治4年(1288年)に源義経(1159～89年)主従が兄頼朝の討手の目を逃れて平泉の藤原氏を頼って落ち延びるとき、小国郷を横断している。また、元禄2年(1689年)5月には松尾芭蕉が門人の河合曾良を伴い、「おくの細道」行脚途中に宮城県大崎市鳴子町の「尿前の関(しとまへのせき)」から山形県の小国郷に峠越えし、「封人の家」というところ(最上町塚田)に宿をとり、梅雨時の長雨で3日間足止めされ『蚤虱(のみしらみ) 馬の尿(ぼり)する 枕元』と異臭が漂うような一句詠み、小国郷の一角を斜行して尾花沢に向かったという、この二つ位である。

芭蕉は、尾花沢から山寺(山形市)立石寺に向かい、今度は爽やかに『閑かさや 岩にしみ入る 蟬の声』の名句を残している。我が町で詠んだ句と雲泥の差を感じる。

- (2) 生まれ育ちも山形県外に出ていない私にとって、米沢藩中興の祖と呼ばれ抜群の為政者の一人として称えられる上杉鷹山（1751～1801年。第9代米沢藩主、上杉治憲の出家名）については、山形県民として何時か書かなければと思っていた。勿論、私自身最も尊敬する人物であることにもある。これが第一の理由である。

第35代アメリカ大統領のジョン・F・ケネディ（1916～63年、在任61～63年）は、尊敬する日本の政治家はと問われて『上杉鷹山です』と返答したという話。『いや違う。それは第25代セオドア・ルーズベルト大統領（1858～1919年、在任1901～09年）で、



新渡戸稲造（1862～1933年）の「武士道」（1900年、英語で著す。鷹山は第5章「仁」に出てくる）を愛読しており、新渡戸と会った時に言ったのだ』など諸説ある。しかし、両方ともに流説の域を出ていないのである。いろいろな人が、理想とする鷹山像を描き称えたいという気持ちは分からないでない。

S・ルーズベルト      J・F・ケネディ

- (3) 鷹山は、宝暦10年（1760年）7歳で第8代米沢藩主の上杉重定（1720～98年）の養子となり、降って湧いたように米沢藩の世子（領主の後継）となった。重定の隠居に伴い17歳で藩主となるが、借金だらけの藩財政に驚いたことであろう。そこから数々の改革業績を残すがその手腕だけが称えられるのではなく、藩主という立場と任務を、人間修養の場として一生を生きた人間だと私は思う。言い換えれば求道者として藩主道貫いた生涯であった。それが取り上げた第二の理由である。

このような人並み優れた人格の形成は、幼少時から師と仰いだ細井平洲（1728～1801年）から受けた感化は計り知れないものであった。鷹山を話題とするとき、平洲を抜きにして語れないが、今回はその多くを書けないこと容赦願いたい。

- (4) 鷹山は、生涯を通じて固有の感性からほとぼしる言葉を多く残している。今回テーマの『なせば成る なさねば成らぬ何事も なさぬは人のなさぬなりけり』の歌は、人口に膾炙されて久しく、数多の人を勇気付けてきたに相違ない。

米沢置賜地区一円の人たちは、意志が強く質素儉約型人間で、頑張屋さんさえ評判される。しかし、単なる儉約でなく無駄はしないという考え方が根本で、ごつい人柄とともに美風として引き継がれてきた土地柄となっており、今に至りなお他所者と一目で判別できる特徴を受け継いでいる。

- (5) この「ワンポイントレッスン」について、空手道のことから離れたり、小難しいことばかり述べるのがあって、大方の読む意欲を減殺しているのではないかと恐縮して

いるが、時には予想もしない遠方から感想や意見が寄せられることがある。

今年1月以降のこの標題は、空手道は心術であるとともに思考の術である。己を磨き、気力胆力を練る人間修養の場ならば、『空手一番である前に、まず人間道が一番でなければならない』と固く信じるからである。その観点から、まず優れた先人たちが残した言葉と足跡について、もう暫くお付き合い願いたいと思う。

## 1 出羽の国のはじまりから荘園の時代

### (1) 大和政権の進出

7世紀の始めころ、本州の北東地方には未だ大和朝廷の支配権が十分に行き渡らない時期で、未開地を総称して蝦夷（えぞ）地と呼んでいた。後世になってからさえ陸奥（むつ、みちのく）の呼び名が残ってしまった。

山形県に関して中央政府の記録に登場するのは斉明天皇4年（658年）のことで、「越の国」と「出羽の国」の境界近くに柵（木柵を回し造り、地方の統治政策の拠点とし、砦のような役割）の造営を命じたとある。その場所は現在の鶴岡市鼠ヶ関と木野俣でないかと推測され、両地区ともに柵跡と思われる遺構が確認されている。中世以降の奥州三関（勿来の関、白河の関と念珠ヶ関）より以前の遺構のことである。

この地の沿岸は大勢の人が通行できる整備がされていない（国道認定は1920年）ため、鼠ヶ関から東方の山地に入り、木野俣から鶴岡に至る山街道が本道であった。

「出羽の国」の語源は、この地より早く大和朝廷の権力が及び稲作も始まっていた「越の国」（現在の富山県、新潟県）に対し、「越の国」の「出端（では）」で更に出た所という意味から生まれたと思われている。本県の庄内地方から秋田県に及ぶ広範な地域を指していた。それに、当時は大和朝廷の統治が及ばない未開地方を、早期に帰属させるのが急務の策であった。



飛鳥神社（酒田市飛鳥）

更に、和銅5年（712年）には『巨勢麻呂進言し百姓を出羽に移す』の記載あるから稲作の導入と関係するかもしれない。

他に同年『出羽の国府を井口（場所不詳）に置く』とあって、このことは「山形県

本題と関連して、私は酒田市（旧平田町）飛鳥にある「飛鳥神社」を取り巻く血統に関わりがある。「飛鳥神社」は事代主命（別称、恵比寿様）を主祭神としており、「神社由緒抄」によれば宝亀5年（774年）、奈良県高市郡明日香村の「飛鳥坐神社（あすかいますじんじゃ）」から勧請（神の分霊を請うて向かい入れること）して創立したとある。その背景には、和銅元年（708年）に『出羽郡（でわのこおり）を置く』とあって、



の歴史」(昭和45年8月初版、山川出版社)とほぼ一致するから、和銅元年以降の状況としては出羽の蝦夷制圧は順調に推移していたものと考えられる。

出羽郡の場所については、鶴岡市赤川下流と羽黒山の間辺りでなかったかと推定されており、酒田市飛鳥地区は最上川を隔てた直線方向に位置する。

なお、宮城県多賀城市にある「陸奥国府」の創建は神亀元年(724年)であるから、出羽国府の方は小規模であっても時期的にはこちらが早かった。

ここで特筆すべきは、「飛鳥神社由緒抄」の記録による国府に赴任した出羽国司の記録である。

それは次のとおりとなっている。

◎平宝字4年(760年) 百済三忠出羽介

◎天平神護2年(766年) 百済文鏡出羽守

この間、同様に百済姓の出羽守4人を経て・・・

◎弘仁3年(812年) 百済教俊出羽守まで

中央から派遣された国司名によれば、「出羽介」から「出羽守」に位が昇格したと分かるばかりでなく、50年余の間に赴任した国司7人の全てが百済人であったのは、全国的に例を見ない。百済人の進歩した知識と技術は、大和政権に大きな恩恵をもたらしており、貴重な人材を何故この地に多く派遣したのか、「越の国」はどうだったか、「越の国」とともに朝鮮半島に近い理由なのかなど、今後調べてみたい課題である。

昭和6年に発見された酒田市城輪の「城輪柵(きのわのき・きのわのさく)」は保存復元されているが、先に書いた初期の柵跡ではなく、一度秋田市近辺に移された国府が、反乱鎮圧の理由などから再び南下して奈良時代後期(764~94年)に移されたもので、出羽国府として最終的な城でなかったかと推測されている。



城輪柵の復元遺跡

出羽の国への大和政権の進出は、最上、村山、置賜へと次第に浸透が図られるが、完全な体制に至るまで4~5年を要した模様である。

朝廷軍が侵攻するまで、内陸部は未開だったのかと一概に決め付けは出来ない。何故ならば、村山、置賜の地区は、古墳時代の大規模な盛土円墳の遺跡が多数発掘され、古墳を築いた人たちの研究解明が進められているのが現状だからである。

## (2) 奈良時代以降と荘園

奈良時代から平安時代にかけては、皇室や摂関家、寺社などの支配下に置かれた荘園の時代となり、出羽の国一帯は藤原摂関家の領園となる。鎌倉時代になると武士階級の権勢が台頭し、守護、地頭の制度が敷かれ、荘園運営に変化をきたす。米沢置賜

に関しては、「長井荘」とか「屋代荘」（高島）の名が記されている。

ここで名を止めるのは、承久3年（1221年）に起きた「承久の乱」（後鳥羽上皇が鎌倉幕府討伐を企てて敗れた）で後鳥羽上皇側に与して敗れた大江親広（生年不詳～1242年。鎌倉幕府の重鎮、大江広元の長子）は、敗北後密かに出羽の国に身をひそめ、次第に勢力を蓄えて自らは寒河江荘を手中にし寒河江親広と名乗り、その弟を長井荘に配置して長井時広（生年不詳～1242年）を名乗らせる。時広は領地の要として米沢に城を築いたのが米沢城の始まりとされるが詳細は不明である。



寒河江城跡から市街地を望む

このように寒河江親広の子孫たちによって、県内の村山、置賜、最上などの各地に一族を配し支配を広げたのが寒河江を中心とした荘園の姿であった。

## 2 戦国時代から徳川の時代

### (1) 最上家の支配と伊達家

南北朝時代（1336～92年）になると、東北は奥羽広域行政圏に編成されるとともに、幾多の戦乱や反乱が続き、南朝方と北朝方が対立し各地で戦闘を繰り返す。北朝方の奥州探題（幕府の地方行政最高指揮官）斯波家兼（1336～92年）の次男・斯波兼頼（1315～79年）は、延文元年（1356年）山形に入部して南朝方の寒河江大江、山家などの抗争を制して山形城を築き、最上兼頼を名乗り最上家の祖（初代）となる。以後、最上家の権勢が他を圧して優位を保つ。

天文17年（1548年）、宮城、福島各域で猛威を振るっていた伊達家第15代の伊達晴宗（1519～78年）は、最上家との抗争に勝利し米沢を本拠地に進出してくる。以降、独眼竜といわれた第17代伊達政宗（1567～1736年。後に仙台伊達家初代）まで三代にわたり統治したのが米沢藩の原型となる。

、最上家11代藩主最上義光（1546～1614年）の代にはそれまで最高の57万石を得て、県内はもとより秋田県南部にまで領地を広げ大大名となる。

### (2) 伊達家の改易

時代は変動を繰り返しながら、織田信長（1534～82年）の天下取りが完成するかと思いきや、天正10年（1582年）6月2日家臣の明智光秀（1528～82年）の謀反により襲撃され「本能寺の変」で落命するが、主君の横死を知った豊臣秀吉（1537～98年）は備中高松（岡山市）から取って返し（「備中大返し」という）主人の敵光秀を討ち取り、その後も織田陣営のライバルたち次々と葬り、程なく豊臣秀吉の天下に移っていく。私見を加えるならば、明智光秀を影でそそのかして信長襲撃を実行させたのは秀

吉であると思っている。理由として、あまりにも的にはまったような「備中大返し」であり、その後の緻密な天下取りまでの行動を見る限り、秀吉の才覚と計画性には計算ずくの経過を見るからである。

秀吉は、伊達政宗が臣従を示していながら小田原攻めへの参戦が遅れたなどの理由から、受領地を減ぜられ岩手沢城（現・宮城県大崎市。後に岩手山城と改名）に移封され、米沢には会津若松藩主の蒲生氏郷（1556～95年）が入った。

この時、上杉家は豊臣家五大老の任にあった。



織田信長画像

### (3) 上杉家の会津若松転封

上杉家の始祖は越後の虎と異名をとり、甲斐の竜といわれた武田信玄（1530～78年）と壮烈なる戦いを繰り返した上杉謙信（1530～78年）である。



上杉謙信画像



武田信玄画像

上杉謙信が49歳で突然死去すると、養子で世子の景勝（1556～1623年）が跡を継ぐが慶長3年（1598年）秀吉の信任が厚かった景勝は、それまで蒲生氏郷の領土だった会津若松に入った。会津における景勝の石高は、佐渡、出羽庄内を合わせて120万石となり、これは徳川家康（1543～1616年）、毛利輝元（1553～1625年）に次ぐ第3位の石高となった。



#### (4) 上杉の米沢転封と石高

慶長3年(1598年)に秀吉が、翌年は前田利家(1538~99年)が死去すると、豊臣政権の中で家康の力は抜きん出た存在となり、ついに慶長5年(1600年)9月関ヶ原の戦いで石田三成(1559~1600年)の率いる西軍が敗北すると、それまで西軍に与みしてきた上杉家は、家康に謝罪するが会津120万石から大きく減ぜられ、領地は信夫、伊達を含む米沢30万石へと減封された。蒲生は氏郷亡きあと嫡子の秀行が跡を継ぐが宇都宮12万石へと移された。

景勝は、この米沢藩30万石に減じられながらも越後以来の譜代や会津120万石時代の家臣団の大半を抱えて移り住むことになる。その家臣数は約5千人、他に足軽、寺社、職人なども隋従しており合わせて3万人以上が移住したものと考えられている。

この大集団の移住は容易な事態でなかったはずで、ここで町割りや藩士の暮らし向き確保に尽力したのが、景勝が会津領主時代に米沢城を与っていた重臣の直江兼続(1560~1620年)である。兼続については、2009年のNHK大河ドラマ「天地人」で取り上げられているので、その優れた才覚を知る人は多い。家臣たちは家禄を三分の一に減ぜられてなお、領主と一緒に米沢に着き従ったのであった。



上杉景勝絵像



直江兼続画像

#### (5) 米沢藩の転封とその後

上杉景勝が最も頼りとした直江兼続であったが、元和5年(1619年)病を得、享年60歳をもって死去。その4年後の元和9年、景勝は嫡子の定勝(1604~45年)を元服させ後継者とし、69歳を一期に関ヶ原の戦いを境とする盛衰流転の生涯を閉じた。

なお、以降は代の順位が一目で分かるよう最初だけ何代と書き、後は「①景勝」のように丸数字を頭に付し代々の領主名を記したい。

二代藩主となる定勝は生後間もなく母を亡くしたため、母代りとなり懸命に養育したのが直江兼続の妻・お船の方(1557～1637年)であった。しかし、定勝は父景勝と違い凡庸な人物だったらしく、窮乏の藩政にさしたる関心も示さなかった。正保2年

(1645年)に41歳で没すると、嫡子・綱勝は8歳で三代藩主となる。幕府から度々の「普請言い付け」などあって藩財政が脅かされる中、18歳で初めて米沢に入部する。



お船の方の墓

家臣たちには節約命を出しながら、自らは好き勝手な暮らしに明け暮れ、家臣の諫にあうと代官や富商などから借財する始末であった。

普請言い付けとは、本来は戦時の陣中において作戦上急を要する普請や工事を援軍などに命令するものだが、徳川幕府は各藩に十分な財力を有することを嫌い、幕府所管の建造物や施設等の普請を命じ、その負担により消費させることを目的とした政策である。参勤交代も同様に江戸に置く家族を人質にして、一年交替に江戸と国元を行き来する費用をもって蓄えを消費させる手段であった。

## (6) 吉良家縁組と不幸の始まり

万治元年(1658年)③綱勝の妹・参姫が、「幕府高家衆」といって幕府の儀式や典礼関係、勅使の接待などの取り仕切りに関わる家柄(旗本)の一つである吉良義冬(1607～68年)の嫡男・吉良義央(きらよしなか、1641～1703年)に嫁ぎ、これが吉良家との関わりの始めとなるが、この縁が後々まで上杉藩財政を難渋させる運命を辿ってしまうとは、この時点では予想だにできなかった。寛文3年(1663年)に長男・三之助を生む。

吉良義央は、「仮名手本忠臣蔵」(元禄赤穂事件)の義士討ち入りで征伐された、あの吉良上野介である。

ところが、寛文4年(1664年)5月、吉良邸に立ち寄った③綱勝は、帰邸すると猛烈な腹痛に襲われ、のたうち回り苦しみ悶えて、6日目に27歳で急死してしまった。



刃傷「松の廊下」絵図

③綱勝には子がなかったため断絶の危機に立たされるが、③綱勝の亡き正室・媛姫(はるひめ)の父で会津藩主の保科正之(1613～73年)が幕府老中たちの間を奔走し、子のない藩主が死の直前、臨終間際に指名して直ぐさま養子縁組をして世



継ぎを決めるという「末期養子」制度の救済措置をもって、吉良義央と参姫の間に生まれた3歳の三之助を上杉家と養子縁組をすることで決着を見た。

しかし、実際は「末期養子」ではなかったわけで、お家取り潰しを免れ存続できた代償として、領地は信夫、伊達と高畠の3万石（幕府直轄の天領となる）を取り上げられ半減の15万石となり、吉良義央の長男三之助が上杉喜平次景倫と名を改め四代藩主となった。

#### (7) 吉良の陰謀

この項は、筆者の私見である。

寛文4年閏5月1日（旧暦）、③綱勝が吉良邸に立ち寄ったのは江戸城からの帰途で、義央と参姫（③綱勝の妹）からの招きによるものであろう。しばし休息の後桜田藩邸に帰るが、帰邸後から激しい腹痛に襲われ、嘔吐を繰り返し、直ぐさま医師たちが呼ばれ手の限りを尽くすが症状は悪化するばかり、6日目の朝6時ころ27歳を末期に絶命した。

これを聞いた米沢藩内では毒殺ではないかといきり立つが、それより先に恐れおのいたのが③綱勝には継嗣がいなかったことである。毒殺説の方は二の次となり、まずはお家存続の方が苦衷の種となってしまった。幕府側も毒殺の詮議に乗り出さなかった。

陰謀術策が渦巻く当時としては、藩主や高禄を食む人たちは「毒見役」を置くほど飲食に警戒を怠らなかった。ましてや殿様を茶に招いておいて粗相など絶他にはあり得ないはずである。

この事件は明らかに毒殺で、③綱勝の兄弟は早世しており子もなかったことを格好の材料（当時の幕法は、世継ぎがない藩は取潰しか改易）として、立ち寄り先は妹と義弟であり、腹痛は吉良邸にいた時から始まって「末期養子」の発言があったとする条件整備は成立する。毒殺の疑いが掛かっても、大目付（大名、高家、朝廷などを検視し、幕府への陰謀の監視役）は同じ旗本仲間であって、高家という立場から伝手もあったのだろう。

毒薬製法と使用法が特段に発達していた時代、この症状から毒薬は「ヒ素（原子番号 33、As）」系でなかったかと思う。

米沢藩存続に奔走したのは会津藩主の保科正之で、③綱勝の亡き正室・媛姫（はるひめ）の父で二代将軍・徳川秀忠の四男である。「末期養子」の言い訳は、その説得力が効を奏したものと思われる。

藩として保科正之に支援助勢を頼むに当たり、臨終の席に立ち会った家老たちの間で議論されたのは当然として、幕閣からは保科正之の五男正純（将軍秀忠の孫）を推す意見もあったが正之は辞退したという。結局「末期養子」は吉良義央の思惑通り長男の三之助（1666～1704年）に決まり、上杉喜平次景倫と名を改め2歳で第4代藩主となる。綱憲と名を改めるのは、延宝3年（1675年）元服してからである。

陰謀の背景には、そのころ吉良家は4000石を拝していたが豪華な暮らしぶりから4000両余の借金と、出入り商人への多額の未払金を抱えていたという。

危ない橋を渡りながら、水面下の工作から藩主就任という離れ業を実現させ、この上杉米沢藩乗っ取りは吉良の作図通りに成功する。

ここに、上杉米沢藩の悲劇が始まるのである。「末期養子」を認める代償として、30万石を更に半分の15万石とするペナルティーが課せられ、吉良家から搾取という二重負担の構図により、藩存続の危機に至り破綻寸前まで追い込まれるのである。

次項で述べるように、この時点では米沢藩が膨大な「囲い金」を有しており、それだけの状況下で困窮はなかったのである。

#### (8) 上杉の囲い金

「囲い金」とは、藩の存続に関わる事態や有事に備えるために隠し持つ資金で、極秘の蓄え金といえよう。

上杉家の場合、越後以来長年の間これを蓄え持ち、会津藩時代も加算された。②定勝の死亡時点で、その蓄えは玉金、延金、砂金が7～8貫目（平均して28kg）94箱あって、江戸時代初期の代価で16万両余り、1両×12万円なら192億円となる。他に竿金と竿銀が数本あって、これは値が付けられないほど高価なもの。「歩金蔵」という場所に保管されており、そのまま積み置くので重さで床が抜けることさえあったという。今の金相場なら如何程になるだろうか。上杉家が佐渡金山の支配を任されていた時期もあるから、支配料も蓄積されたのだと思う。

この「囲い金」は、④綱憲の代になると瞬く間に消費され、元禄15年（1705年）には家中（藩士）から俸禄も四分の一を借り上げ（事実上の減禄）、商人から借金するなどを繰り返して、「囲い金」も使い果たすと米沢藩の財政は窮乏の一途をたどることになる。

(つづく)

本稿の作成に当たり次を参考資料とし、又は一部を引用している。

- 1 飛鳥神社由緒抄、並びに同別考（飛鳥公民館）
- 2 山形県の歴史（著者：誉田慶恩・横山昭男、山川出版社）
- 3 米沢藩（著者：小野 榮、現代書館）
- 4 代表的日本人（著者：内村鑑三、訳者：鈴木範久、岩波文庫）
- 5 漆の実のみのもる国、上・下（著者：藤沢周平）
- 6 武士道（著者：新渡戸稲造、訳者：奈良本辰也、三笠書房）
- 7 小説・上杉鷹山（著者：童門冬二、集英社文庫）
- 8 上杉鷹山の経営学（著者：童門冬二、PHP文庫）